

# 生涯消えない日々の記憶

—戦争の終わった日まで—

大津 一郎

私、小学校六年生（十二歳） 小田原市立小田原尋常小学校

家族構成 私を含め七人 祖父 祖母 母 妹二人 父セメント工場機械設計技師 台湾出張中

家は小田原市浜町（旧万年） 相模湾に面した防波堤・広い砂浜そして魚市場に蒲鉾の街  
時は

昭和二十年八月十日の朝 晴れ

ギラギラと焼きつける太陽が照りつけ 砂が焼け、裸足では歩けない程だ。十二歳まで私の役目は、毎朝海岸で行われる地引網を手伝い手間賃として、

少々のシラスを貰い朝のみそ汁のだしを得る事であったが、戦況悪化で、毎朝相模湾の水平線に見える軍艦の数と艦砲射撃の様子を祖父（元日露戦争に従軍した戦士）に報告する役目になっていた。

今朝も家に帰ると、隣組の会長が竹の束を抱え「戦況が最悪だ、情報によると、敵が上陸して来るそうさ。竹を削って竹槍をつくり、戦うんだ」と各家に告げ廻っていた。



今日、何かは分からないが、動いた？いや動かされた：日本が：分からない？でも私は何かを感じた。勝つためには竹槍を作って戦い、きつと勝ってみせるぞ！と。

真夏の真っ白い雲が穏やかに水平線に棚引き、とっても美しい朝の風景だった。

そしてその日の午後、次の指令が来た。

「皆で砂浜にタコつぼを掘れ！ 今日中にだ！」

「そして家財、家具で囲むんだ！」と。

重苦しい空気が漂い、息を殺して灯もつけず、ジット何事も無いことを祈りながら、戸を閉め話声も小さく、朝・昼・晩・夜と水平線を見つめていた。

不可解な二日間、街は何事も無く過ぎた。

四日目の八月十三日

昼頃、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴った。

爆音が直ぐ近くに感じたので玄関に出て上を見ようと半歩出た時、一機の飛行機が目の前にいた。信じられない位の低空飛行だった。飛行機の後ろに機関銃室があるP-36偵察戦闘機だった。顔が見え機関銃もはっきり分かった。機首を上げながら撃ってきた。

私は必死で踏みとどまり、隠れた。その瞬間、耳が裂ける程の銃声がし同時に地面に点線となった穴が連なり、空の葉きようが飛び散っていた。あと半歩出ていたら“死”だった。

五日目の八月十四日

昼頃、今日もサイレンが鳴った。空襲警報だ。又か、と家の防空壕に頭巾を被り入る。市内は覚悟していた様な静けさと歩く人影もない無言の街と化した。夕刻まで緊張が長く続いたが、漸く解除のサイレンが鳴ってホッとした街にチラホラ灯がとまり始めた時、突然はぐれ鳥の様なB-29一機、明るくなった街に焼夷弾を落とし飛び去った。

それからが大変だ！

私の家のすぐ裏まで火の手が押し寄せて来た。家の手押しポンプを皆で交代であおり、バケツリレイの消火作業が夜明けまで続いた。薄ら明けた朝日の中に裏の家と私の家との間に、不気味な不発の焼夷弾があった。何と私の家の神棚と仏壇の真裏だった。

六日目の八月十五日

ホツとして、朝食を取ろうと家族が集まった時、町内会長が「今日十五日正午に重大放送が有るので、ラジオが残っている家では、焼け跡に用意して下さい」と連呼して来た。

気がついて焼け跡を見廻すと、街角ごとに兵隊さんが銃に短剣を付け立って居た。

正午、皆が見守るラジオから 玉音放送で「日本が戦争に負け連合軍に無条件降伏をした」と、天皇陛下のお言葉が流れた。日本が戦争に負けた。負けたんだ！ と実感した。

悔しくて、悔しくて、泣けて泣けて涙が止まらなかった。悔しいよ！ くやしいよ！ と一人握った手の拳で、涙も分からずやたら叩き、歩き廻った。最後に又叫び、泣いた。

皆も力が抜け座り込み、味わったことのない虚脱感、そして言葉を失い魂もどこかに置いてきてしまった。動物よりも劣る人間動物がウロウロしていた。

海岸の砂浜から「大津のおじいさん！」と急いで走りながら叫んでいる声がした。駆けつけると、一人の兵隊さんが死んでいた。町内会長は様子から総てを察し、【覚悟の自決だ】と云った。急いで祖父の元へ戻ると、「二郎、線香と般若心経を唱えてきなさい」と命じられ、夢中で経を唱えたが、顔は見られなかった。

午後学校へ行く途中、城址公園の桜の木で一人の兵隊さんが首つり自決をしていた。

今日は何なんだ！？ と興奮している自分と、静かに静かにしろよ、と言い聞かせている、もう一人の自分が居た。

まったく経験した事の無い出来事 — 日本が負けた — のだ。



明日は、その次の日は？……これからは？……教えて、教えてと聞き廻っても、答えはない……！ 敗戦終戦  
今日 目の前で起きた事なんだ……

それは

紙芝居や映画やお芝居の世界では無い、今、起き、動き出した現実なんだ、と肌で感じ心に深く浸み込んだ。